

エントリー名：下関市立長府中学校

活動名：長府の街は君なしじゃはじまらない

～ 生徒の主体性と郷土愛を育む仕組みづくり ～

解決すべき課題：「将来、地域や社会のために貢献したい」と考える生徒の割合が少ない

本校生徒は、学校生活に誠実に向き合い、学力調査の結果も安定している。一方で、受け身の生徒が多く、自ら課題を発見し行動する力の育成が課題となっている。この傾向は「自己肯定感」の低さに表れており、「将来、地域や社会のために貢献したい」と考える生徒の割合も少ない。

学校周辺には、幕末の歴史を今に伝える観光スポットや博物館が点在し、地域の商店街も活気に満ちている。地域住民や保護者は世代を超えて熱心に活動しており、まさに“生きた教材”とも言える環境が広がっている。学校は、こうした大人の想いに触れさせながら、生徒と地域をつなぎ、地域貢献の意識と行動力、地域への愛着を育む場であるべきである。

しかし、学習指導や生徒指導、不登校生徒への対応、部活動指導など、教員の業務は多岐にわたり、地域との連携・協働に十分な時間と余裕を確保することが難しいのが現状である。

目標：地域貢献活動に自ら手を挙げ、長府のまちで主体的に活動する生徒を200人以上育てる

本校では、学校教育目標(=OUTCOME)を

『三気の教えと郷土愛を誇りとし、夢の実現に向けて主体的に活動できる生徒の育成』とし、全ての教育活動がこの学校教育目標達成に向かうべく、教育課程を編成し、コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校運営を行っている。特に、目標にある「郷土愛」と「主体的に」の部分は、学校の枠を超えた地域との連携・協働による取組が大きなカギを握っている。

方針：教員に負担をかけずに生徒が主体的に地域活動に参画する持続可能な仕組みを作る

1. 1年間の地域貢献活動を年度当初に見える化し、自分にできそうなことをイメージさせる
2. 活動やイベントの目的を主催者から直接、生徒たちに語ってもらう(それを教員も聞く)
3. ICT技術を用い、参加生徒の管理や学校と地域のつなぎを簡略化する(担任の負担減)
4. 小中高生を交えた「熟議」を実施し、生徒・教員・地域住民が互いの想いを共有する
5. 教職員は、教育課程外の活動(特に土・日)に直接関わる必要はない。その代わりに、日々の関わりの中で生徒の内面に働きかけ、地域活動への意欲や主体性を育むことに専念する

活動内容①：教員の負担なしに生徒が地域とつながり、地域貢献活動に参加する仕組みの構築

学級担任や部活顧問に依頼することなく、生徒が自ら手を挙げて活動に参加できる仕組み。

目的手段	顔見知りの関係をつくる工夫	ICT技術の活用	地域で経験・体験を積み、地域貢献活動の良さを実感	自己肯定感アップを狙う
流れ	 地域ビデオの上映	 参加申込	 地域貢献活動の実施	 活動証明書の授与
学校	撮影は地域担当	Google Form	ボランティアベストの貸出	校長室で授与式
業務改善	(学級担任) 給食時にビデオを流す	一覧がスプレッドシートに	名簿一覧を地域代表に渡す →ボランティア保険に加入	地域団体が作成→自己推薦入試に

活動内容②：地域や子どもたちと膝を突き合わせて話をする機会を作る

教員の負担軽減は必要なことではあるが、関係者と「目標やビジョンを共有する」ことは決しておろそかにしてはならない。そこで本校では、毎年「熟議」を実施し、全教員を参加させている。生徒の内面に働きかけるには、教員もその舞台となる地域住民の想いに直接触れる必要がある。



取組の過程：ポイントは、人々の「意識改革」と「取組や活動の実践」を段階的に進めること  
 目標達成に向けた取組を進めるにあたり、最も難しいのは、人々の「意識改革」である。そこで、以下のような段階を踏みながら、「意識改革」と「取組・活動」を同時に進めてきた。

段階	地域住民・団体・PTA	教職員	生徒
第1段階 →理論上の意識改革	・バーチャルな世界で生きていく生徒たちに、リアルな体験をさせましょう ・「ボランティア」ではなく、地域貢献活動という位置づけをお願いしたい	・全ての教育活動は、学校教育目標の達成に向けて行われるもの ・地域や社会に目を向けた教育活動を展開する方針を理解させる	・年に1回は「長府のまちで活躍しよう」の方針、ボランティアではなく「地域づくりへの参画」の意識を全校生徒に浸透させる
第2段階 →実行による意識改革	・生徒たちに、直接「想いや活動の目的」を伝えてほしいことを地域に依頼し、ビデオを撮影 (5月～11月は8本)	・給食時間に教室で地域ビデオを上映・視聴 ・小中高熟議への全員参加により、地域住民と目標・ビジョンを共有	・興味のある取組・活動に自ら申し込む ・部活動・塾・遊び等の時間を生徒が自分自信で調整する
第3段階 →他者との関わりによる意識の変化	・学校に足を運ぶ回数が増加。それに伴う生徒と関わる頻度の増加 ・学校の現状や生徒の様子を正しくご理解いただく	・学年・分掌に関係なく、地域住民・保護者の想いを知る機会の増加 ・勤務に関係なく、生徒の活動の様子を見に行く	・地域の方と顔見知りの関係になることによる安心感の向上 ・学校内外での気持ちのよいあいさつ
第4段階 →持続可能な取組へ	・PTAや学校運営協議会での協議、地域学校協働活動推進員との連絡・調整	・生徒の主体性を伸ばすための声かけの増加 ・教員の主体的な関わり	・未経験者や友だちを誘う経験者の増加 ・地域課題への関心

その他、生徒・教員の意識を高めるための広報として、「地域貢献活動参加者の名簿を掲示」「活動の見える化のために写真の掲示」「HP・学校だよりによる紹介」「経験者が未経験者に語る会の設定」などを行うとともに、教員が生徒に感想を聞いたりすることで、自己肯定感、自己有用感の向上に結び付けるようにしている。

活動の成果：

① 主体的に地域の活動に参画する生徒数の増加

4～11月(予定)までの地域活動に自ら手を挙げて参加した生徒数は、全校生徒418名中107名(25%)にのぼる。部活動や地域クラブ、習いごと、塾、受験勉強など、日々忙しい生活を送る中で、この参加率の増加には学校側も驚きを隠せない。

土曜夜市	ペンキ塗り	月見イベント	防災訓練	光の祭典	海響マラソン	・・・
23名	7名	4名	15名	46名	76名	・・・

11月以降も中学生が参画する活動やイベントがあり、多くの参加希望者が出ている。3年生は受験シーズンのため無理はさせないが、年間で全校生徒の約半数が自ら手を挙げて地域貢献活動に参加する目標に近づけている。生徒たちの「主体性」の育成は、着実に進んでいる。

② 教職員の負担軽減

昨年度までは、地域から活動実施直前の依頼がくることが多く、参加生徒を募るのに大変苦労した。参加希望が出なかったら、部活単位で参加をお願いするなど、顧問も土日に勤務外の時間がとられることがあった。しかし、この度の仕組みづくりの成果もあり、学級担任は日頃の生徒との対話の中で、自然に「地域や社会貢献」の話題ができるようになった。興味をもつ生徒の“背中を押す”ことや、未経験者の“心に火を付けること”に専念できるようになったことは大きい。また、活動やイベントに興味をもった教員が、無理なく自主的に生徒の活動の様子を見に行くなど、教職員の負担感の軽減につながっている。